ヤンマーサッカーOB会

会　報

■ 発行日　平成22年11月吉日
■ 発　行　責任者：矢野正人

故・ネルソン吉村殿堂入り!!

ネルソン吉村大志郎氏（2003年死去）が日本サッカー発展への長年にわたるご尽力と功績が認められ「日本サッカー殿堂」入りを果たす。

ネルソン吉村氏はヤンマーサッカー部のMFとしてブラジルから来日、1967年から1980年までクラブに所属、釜本選手らと共に、ヤンマーサッカー部の黄金期を築いた、また1970年には日本国籍取得、日本代表選手としても大活躍された。

9月11日開催（VS広島）セレッソ大阪のホームゲームでは殿堂入りを祝して、森島アンバサダーからネルソン吉村氏ご家族へ花束贈呈のセレモニーも執り行われました。

©1994.OSAKA F.C.

平成21年度事業報告

事業報告

＊H20年度OB会総会
H21年6月13日(土) 17：00～ 於：ホテルホップインアミング
第１号議案・第2号議案、満場一致で可決

＊ヤンマーサッカーＯＢ会 会報（第4号）発刊
H21年10月

＊ヤンマーサッカーＯＢ会ホームページの見直し実施
H21年10月 ＯＢ会会報 第4回を追加

＊第1回ネルソン記念カップ開催
H21年10月17日 於：ヤンマー尼崎サッカーグランド

＊尼崎マスターズサッカー大会参加
平成21年11月22日(日) 於：尼崎陸上競技場
優勝・ヤンマーＯＢ会3位(4チーム参加)

＊ゴルフコンペの開催(ＹＳＧ会)
第21回 平成21年10月27日
優勝　有村 宏三郎氏　於：花屋敷ゴルフ倶楽部吉川コース
第22回 平成22年4月27日
優勝　園田 明氏　於：花屋敷ゴルフ倶楽部吉川コース

＊懇親会 Jリーグ 観戦
10月18日(日) セレッソ大阪ｖｓ愛媛ＦＣ
11月　8日(日) セレッソ大阪ｖｓザ･スパ草津

＊理事会の開催(6回開催)
平成21年7月17日､8月21日､9月24日､10月23日
平成22年4月23日､5月28日

平成22年度事業計画について

（自 平成22年5月21日 ～ 至 平成23年5月20日）

事業計画

＊平成21年度OB会総会
（H22年6月12日 ヤンマー尼崎体育館内会議室）

＊第2回 ネルソン記念カップ開催（H22年10月）

＊尼崎市マスターズサッカー大会参加（H22年11月）

＊ＯＢ会ゴルフコンペ開催
（H22年10月26日・H23年4月26日 いずれも第4火曜日）

＊懇親会　家族同伴でＪリーグ(セレッソ大阪) 観戦
（平成22年秋）

＊理事会の開催　６回以上／年

＊会報の発刊　第5号(秋予定)

＊ヤンマーＯＢ会のホームページの積極的活用

＊その他

2010 ワールドカップ南アフリカ大会を振り返る

日本中が、いや世界中が熱狂した2010ワールドカップ（W杯）。今回の大会は、私にとって特別なものになりました。というのも、私にとっては現役を引退して初の大会だったからです。「日本はどんな戦いをするのか?」「ほかの国はどんなサッカーを見せるのか?」―わくわくしながら開幕を迎えました。

日本代表は見事にベスト16という結果を残しました。準備段階ではあまりいい結果が出ず、不安視する声もありましたが、そんな中で選手たちが一丸になったこと、そして岡田監督の思い切った選手起用とポジションチェンジが功を奏しました。

振り返れば、初戦のカメルーン戦が大きかったです。阿部選手をアンカーにした3ボランチにしたことで守備のバランスがよくなり、松井選手のキープ力、本田選手のポストプレー、大久保選手の運動量により前への積極性も出て、いい形で先制できたことがすべてでした。あれで、選手はもちろん、サポーターも「日本はいける！」と、雰囲気が一変しました。

2戦目のオランダ戦、3戦目のデンマーク戦もそれぞれに見どころがありました。オランダ戦は、負けはしましたが、自分たちのサッカーを貫いて1失点。おかげで第3戦は引き分け以上でOKという状況に持ち込めたのです。デンマーク戦は3-1､「日本は強い」という印象のまま決勝トーナメントに進みました。2002年の大会では、ホームの利を最大限に生かしての決勝トーナメント進出でしたが、今回は違います。日本の歴史が塗り替えられるすばらしい結果でした。

パラグアイ戦は惜しくも敗れましたが、最後はPK戦で、運の部分がありました。限りなくベスト8に近づいた敗戦だったと思います。

4年後に向けて、「もうひとつ上にいくために何が足りないのか」が見えたと思いますし、悔しい思いをした選手は、今度こそという気持ちを持っていると思います。また、チームがひとつになればこれだけできるということを伝えてくれた今回の日本代表にサッカーの魅力、W杯のすばらしさを見て、私も本当に感動しました。

世界に目を向ければ、今大会ではブラジル、アルゼンチンといった南米のチームが、守備の意識を強く持っていたのが印象的でした。そんな南米勢が予選リーグで強さを発揮したのですが、決勝トーナメントでは苦しみました。ブラジルが思いのほか早く敗退したのは、ヨーロッパのチームがリスクを冒して前に出るサッカーをしてきたことで、うまく機能しなかったからです。

そんな中で優勝はスペイン。予選リーグからずっと同じ戦い方― ディフェンスもオフェンスも組織で行なうポゼッションサッカー、ボールを動かしてフィニッシュまでいく技術の高いサッカーをやり通したチームがW杯を手にしました。1-0というスコアながら、見ている人を楽しませるサッカーを見せてくれ、日本も学ぶところが多かったと思います。日本も技術の高い選手が多いですから、お手本にできるでしょう。日本の健闘とあわせて、今後に向けて明るいものが見えた南アフリカ大会でした。

平成3年 入社　セレッソ大阪アンバサダー
森島 寛晃

親という字は「木のうえに立って見る」と書く

私は今年7月に、多くの皆様に支えられ四年間（専務理事含め六年）勤めたＪリーグチェアマンを退任した。この間、私は子供たちの育成には重点的に力を注いできた。Ｊリーグや世界のリーグで活躍できる優秀な選手を輩出したいという思いで、全国のＪクラブや地域の皆様と共に育成組織（アカデミー）を強化してきた。

子供たちの育成環境や生活事情を見聞きした中で、気になったのは親や指導者（監督やコーチ）の過干渉だ。子供たちのサッカー大会では、親や指導者から「早く蹴れ」「ラインを上げろ」と厳しい注文が飛び交う。親や指導者のプレッシャーを受けることで、子供たちは委縮し、それまで生き生きとしていたプレーが急にぎこちないものになってしまう。この傾向は高校年代まで続くと聞いた。

子供たちを育てるのは親や指導者であり、地域の大人たちだ。そこで勘違いしてはならないのは、子供をよく見てやるというのは過干渉することではないということだ。

子供たちの想像力には限界がない。自ら考えトライし、失敗と成功を繰り返す。自分なりに工夫してうまくいった時に初めて自身が芽生える。チームメイトと共に勝つ喜びはきっと格別なはずだ。親や指導者に勝たせてもらっても子供たちはうれしくもなんともないだろう。自らチャレンジして手にした勝利にしか、達成感も自身もついて来ない。大切なのは子供たちのやる気や自由な想像力を、親や指導者は我慢強く見守ってやることだ。そのうち、大人たちでは考えられない、また思いもよらない発想のプレーが飛び出すだろう。

我々の世代が子供たちや孫たちにしてやるべき仕事は何か？子供たちが伸び伸びとスポーツを楽しめる、自由に体を動かせる環境を整えてやることだ。

芝生のピッチがあり、クラブハウスがあって、自然に子供たちが集まってくる場所づくり。そんな環境が広がれば、自然に子供たちは育ち、仲間と過ごす時間が増え、そしてなによりも新しい仲間ができるのが喜びだ。

これからも、環境づくりを推進したいと思う。

Ｊリーグ・名誉会員
鬼武 健二

ＹＳＧだより

第22回YSG会

平成22年4月27日　花屋敷ゴルフクラブよかわコース

当日は少し肌寒く天候も年配者には応えましたが18名の参加をいただき大変楽しい一日を過ごすことができました。結果は下記のとおりです。

優　勝　園田 明 氏
準優勝　村上 隆 氏
３　位　笠井 孝司 氏

第23回YSG会

平成22年10月26日　花屋敷ゴルフクラブよかわコース

今回はJリーグチェアマンを退任された鬼武さんも参加され好天に恵まれたなか熱い戦いが繰り広げられました。上位には久々にベテランが絡みました。

優　勝　井上 洋介 氏
準優勝　村上 隆 氏
３　位　鬼武 健二 氏

ヤンマーサッカー部の思い出

私がサッカーをする事と成ったのは、昭和32年ヤンマー神崎工場へ入社、神崎工場内で（故）東さん、本田さん達がサッカーをされており、勧誘され入部し、その後本社、神崎高級工機、神崎工場の合同チームを結成、ヤンマーサッカー部として発足する事となりました。練習は神崎工場の資材置場を整理してグランドを作り、当時は砂地で雨が降れば水溜りが出来たり、石がゴロゴロと出て来たり、整地をしながら会社の仕事が終了してから遅くまでボールを蹴っていた。素人の集団であった。その後高校、大学での活躍した人達が入社し、部は躍進していく事となり、大阪実業団トップ、関西リーグ代表「都市対抗」全国実業団選手権「関西代表」等々の強いチームに成って行きました。私がその一部員として在籍していた事が忘れる事のない良い青春時代でした。現役引退後はヤンマーサッカーの応援者としてセレッソ大阪がJリーグで活躍する事が、ヤンマーOB会の一員として願っています。

昭和32年 入社　井田　勝彦

セレッソ大阪の活躍を見聞きして 赤本「ヤンマーサッカー部の歴史」を紐解いています

私の回顧録として、OB会活動の中で此の歴史本作成に、携われた事が今は喜びです。

自分がヤンマーで、サッカーをやっていたことを、子や孫に伝えられたし、現在の礎を築いた草創期の仲間と共に一時期ではあるがプレー出来たことを、自分に褒めてやりたい。思い起こせば約十年ほど前、鬼武さんの提案でサッカー部の歴史本（セレッソの母体チームとして）を、みんなで作ろうやと言う事になりスタートしたが、素人集団での編集活動、資料集め、年代別懇談会開催等、3年間紆余曲折を経て2002年6月やっと完成した。

発刊記念パーティーは、ヤンマー本社で開催、山岡家の関係者、会社の幹部、招待客、そしてOB会員により盛大に行われた。今でも思い出されるが、ブラジルコンビのネルソン吉村と、ジョージ小林が、抱き合って再会を喜んでいた光景、しかしそのネルソン吉村氏は、翌年（56歳で）死去され誠に残念でしたが、先日の報道で、『日本サッカー殿堂』入りが決まり我々OB会員としても大変喜びを感じております。同時に歴史本の監修をして頂いた、元サンケイスポーツ社の賀川浩氏も殿堂入りされた。

スポーツクラブ関係で歴史本はあまり聞かない、ましてや当時有名なサッカークラブでも歴史本は無かった。（古河電工、三菱重工、東洋工業、日立製作所、新日本製鉄など）従って赤本贈呈後、お礼の返事で大変羨ましがられ各チームも、ヤンマーを見習って作りたいとの事でした。

最近になって、プロ野球の国鉄スワローズ球団（現ヤクルト）が、歴史本を作成したと新聞に載っていたがヤンマーサッカー部の方が早く作ったんだと心の中で自慢しております。

今思えばよくぞ作れたものだ…鬼武さんの提案で－編集委員の執念で！達成感を味わえて嬉しく思い出しております。

OB諸兄も今一度、赤本を取り出して読み返して見て下さい。当時の様子が思い出され自然と笑みが浮かぶでしょう。

昭和33年 入部　三好　和久太

訃　報

本年下記のご両名がお亡くなりになられました。

白石 義勝 殿　（53歳/5月12日ご逝去）　　吹田 茂夫 殿（62歳/8月20日ご逝去）

ご両名のご冥福を心よりお祈り申し上げます。